

速報

編集レター

阪神大震災と5年前の サンフランシスコ地震から ライフラインの安全性と 信頼性を考える。

1月17日に発生した阪神大震災は震度7の激震を記録。しかも都市直下型で未曾有の大惨事を招きました。広域にわたり都市のライフラインが寸断され、給水施設が壊滅的な被害を受け、一時は100万世帯以上が断水に見舞われていました。1カ月が経過した今（取材当時）も、急ピッチで復旧工事が進められていますが、今だ多数の世帯が困難な状況にあります。今後の震災復興に

際し、阪神大震災を教訓とする給水システムの確立を目指し、調査が進められていくと思われま。日本銅センターも今回の震災を教訓として、調査の詳細や銅配管の在り方などに関する報告を後日改めて行いたいと思います。

さて、ここで思い起こしていただきたいのが、5年前のサンフランシスコ地震。今回同様、高速道路の倒壊やライフラインへの深刻な被害状況が報告されていました。中でも都市圏周辺における軟弱地盤などの液状化発生による状況悪化は、共通しており、その際も耐震を配慮した配管施工が取り上げられていました。ここにそのときの調査に赴かれた建築学会サンフランシスコ地震調査団長・国土館大学木内教授の報告があります。その一部に銅管に対する評価の行りがありますので、一部を抜粋してみます。「軟弱地盤に対しては、フレキシブル性を持った配管シ

ステムなら、建物への引き込み導入管同様に地震による災害はかなり減る傾向を示すことは間違い無い。被害率の少なかった管材のひとつに耐食性と柔軟性がある銅管があることがわかった」。「特に分岐した後の建物引込み管は量水器の間に曲りを取り、管にたるみを持たせることでフレキシブル性が付加し、軟弱地盤のみでなく、硬地盤でも有用であることがサンフランシスコ市および震源地に近い各都市、さらにロサンゼルス市などで、実際に主に銅管を採用していることで実証されている」。震災対策にもこれらを教訓として、これまでの設備を含めて十分に検討を進められた配管への対応が行われることを期待したいと思います。最後になりましたが、被災者の皆様に、謹んでお見舞いを申し上げます。

